

座談会
Round-table
Discussion

社会性の視座のもと、 資本主義の未来を考える



久保田政一

くぼた まさかず

(司会)
経団連副会長・事務総長
経団連 21世紀政策研究
所所長

中島隆博

なかじま たかひろ

東京大学東洋文化研究
所所長
経団連 21世紀政策研究
所研究主幹

小川さやか

おがわ

立命館大学大学院先端
総合学術研究科教授

小野塚知二

おのづか ともじ

東京大学特命教授・東
京大学 EMP コチエア

安田洋祐

やすだ ようすけ

大阪大学大学院経済学
研究科教授

経団連が掲げる「サステイナブルな資本主義」の深掘りと実践を目的として、21世紀政策研究所では「資本主義・民主主義研究プロジェクト」を推進し、資本主義の未来や目指すべき社会について、様々な角度から検討を深めている。

本座談会では、哲学、経済学、文化人類学、経済史学など、各界第一線の研究者が一堂に会し、社会性の視座のもと、資本主義のこれまでと今後のあり方について、対話を行った。

久保田 1980年代以降の新自由主義や株主資本主義が貧富の格差拡大や地球環境問題を引き起こしたとの反省のもと、経団連では、サステイナブルな資本主義の実現に向けて成長戦略を転換し、地球環境の保全や公正公平な社会の実現、成長と分配の好循環、分厚い中間層の形成などを主眼にして、様々な活動を展開しています。そのためには、「社会性の視座(From the social point of view)」に立脚した企業行動を実践していくべきとして、企業行動憲章を通して企業行動のバージョンアップも呼び掛けています。

それと並行して、経団連のシンクタンクである21世紀政策研究所においても、2022年から「資本主義・民主主義研究プロジェクト」を立ち上げ、資本主義の未来や目指すべき社会について、様々な角度から検討を深めています。

本日は、資本主義のあり方をテーマに、哲学、経済学、文化人類学、経済史学など、各

界の第一線の先生方にお集まりいただきました。早速ですが、資本主義の現状をどう評価しているか、中島先生からお話しただけですか。

モノやコトを超えた「人の資本主義」を

中島 現在、21世紀政策研究所で研究主幹を務め、資本主義と民主主義というふたつの社会システムの相互関係について考察を深めています。

資本主義は全てを覆う理念のように思われがちですが、あくまで社会システムのひとつにすぎません。もうひとつの社会システムである民主主義と共存しているのが大きな課題であると考えています。

20世紀以降、資本主義自体が大きく変容し、格差の問題や地球環境への負のインパクトなど、厄介な側面が表出してきました。社会的な不正さの表れとも言える格差をどう是正するのか、資本主義の中だけで解決できるのか、民主主義を含む他の社会システムとともに問題解決を図るべきか、といった点が現在の検討課題です。

Profile

中島隆博 なかじま たかひろ

東京大学東洋文化研究所所長
経団連21世紀政策研究所研究主幹

東京大学大学院総合文化研究科准教授を経て2023年4月から現職。研究分野は、中国哲学、世界哲学。主な著書に、『思想としての言語』（岩波現代全書、2017年）、『危機の時代の哲学—想像力のディスクール』（東京大学出版会、2021年）、マルクス・ガブリエル&中島隆博『全体主義の克服』（共著、集英社新書、2020年）、『中国哲学史—諸子百家から朱子学、現代の新儒家まで』（中公新書、2022年）、編著に伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編『世界哲学史』全8巻+別巻（ちくま新書、2020年）など。



Profile

小野塚知二 おのづか ともじ

東京大学特命教授/東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラム(東大EMP)コチエア

東京大学社会科学研究所助手、横浜市立大学商学部助教授、東京大学大学院経済学研究科助教授、教授を経て、2022年4月から現職。主な著書に『大塚久雄から資本主義と共同体を考える—コモンウィール・結社・ネーション—』（梅津順一と共編著、日本経済評論社、2018年1月）、『経済史：いまを知り、未来を生きるために』（有斐閣、2018年2月）、小野塚知二編著『第一次世界大戦開戦原因の再検討—国際分業と民衆心理—』（岩波書店、2014年12月）、『共同体の基礎理論 他六篇』（小野塚知二編、岩波文庫、2021年12月）など。



Profile

小川さやか おがわ さやか

立命館大学大学院先端総合学術研究科教授

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科単位取得退学。国立民族学博物館助教、立命館大学准教授を経て現職。主著に『都市を生きぬくための狡知—タンザニアの零細商人マチンガの民族誌』（世界思想社、2011年。第33回サントリー学芸賞）『「その日暮らし」の人類学—もう一つの資本主義経済』（光文社新書、2016年）『チョンキンマンシヨンのボスは知っている—アングラ経済の人類学』（春秋社、2019年。第8回河合雄雄学芸賞、第51回大宅壮一ノンフィクション賞）など。



Profile

安田洋祐 やすだ ようすけ

大阪大学大学院経済学研究科教授

2002年に東京大学経済学部を卒業。2007年米国プリンストン大学Ph.D.を取得（経済学）。政策研究大学院大学助教授を経て、2014年4月から現職。編著に『改訂版 経済学で出る数学 高校数学からきちんと攻める』（日本評論社、2013年）。監訳に『オークション・デザイン：ものの値段はこう決める』（早川書房、近刊予定）、『ラディカル・マーケット 脱・私有財産の世紀』（東洋経済新報社、2019年）、共著に『資本主義はどこに向かうのか—資本主義と人間の未来』（日本評論社、2019年）など。



Human Co-becoming

他者とともに人間的になっていく という新しい人間観が求められている

資本主義のこれまでと今を考えるうえで、資本主義がどのような人間観と結び付いてきたかを整理することが重要です。わたしは、「モノの資本主義」「コトの資本主義」「人の資本主義」に分けて考えています。

モノの資本主義における人間は、生産者や消費者、所有者であり、個人が特定のモノや自分の身体を所有するという近代的な人間観と近接したイメージで定義されてきました。ところが、モノが過剰に生産され、消費がでなくなってしまうと、別の差異を見いだし、そこから利益を上げる必要が生じます。資本主義はここで、モノではなく、出来事や経験といったコトに向かうのです。

しかし、世の中を俯瞰してみると、コトの資本主義で提示されるのは、あくまで消費しやすい、ある種のパッケージ化された差異に留まっています。初め、モノを作るとは何か、コトを提案するとは何か、が考えられるのではないのでしょうか。

こうしたことをアカデミアの中だけでなく、経済界の方々とともに考えることが極めて重要です。ドイツのThe New Instituteという研究機関では、ボン大学教授で哲学者のマルクス・ガブリエル氏がアカデミックディレクターを務め、アカデミアと経済界の人たちが一緒にあって、現在直面している課題に取り組んでいます。そこで、21世紀政策研究所と連携しながら、新しい概念を共に発明する場作りをしていきたいと思っています。

人間の生の価値合理性と 資本主義の目的合理性の間の相克

久保田 続いて小野塚先生から、経済史という観点から、資本主義を巡る議論の史的展開を含め、現在の資本主義をどう捉えていらっしゃるか、ご説明いただけますか。

小野塚 資本主義は、それ自体が極めて形式的合理的かつ目的合理的な経済システムであると考えています。「形式合理的」とは、例えば貨幣という形式的な尺度で計った利潤や利

すぎません。我々の生は、消費しやすいものだけではなく、困難や思いがけない出来事といった偶然性に満ち溢れています。ところが、コトの資本主義では、まるで全てが計算可能かのようにコトを落とし込み、そこから利益を上げていく傾向がありました。そこで前提とされている人間観は、自分の経験をいかようにもデザインできる主体としての人間です。しかしながら、実際の我々の生は、そこまで単純化されたものではありません。そこでわたしはもうひとつの概念として「人の資本主義」を提唱しました。ここで言う「人」は、近代的な人間存在とは決定的に違うものです。わたしは「Human Being」に代えて「Human Co-becoming」という言葉を使っています。

人間は、最初から完成した存在ではありません。また、他者と共にある根源的な社会性が利潤を最大化することを良しとする行動原理に従って動くことです。「目的合理的」とは、利潤率を高めるといふ目的を達成するために何らかの手段を採用し、その手段が目的達成にとつて効率的か否かによってその手段的確かさが証明される仕組みのことです。

他方で人間は、欲望を充足しなければ生きていけません。資本主義の形式合理性と目的合理性では、人間の生の持つ様々な側面を十分に満たすことはできません。人間の生は、形式的・論理的に正しいかどうかではなく、現在実質的に何が必要かという「実質合理性」に依拠します。介護や育児といった人間の生の極限的な部分には、実質合理的な性格が良く表れていると言えるでしょう。

また人間の生には、目的を達成するのに最も効果的な手段を選ぶことが正しいのではなく、自分の信じる価値観を満たすという意味での「価値合理的」な側面もあります。人間の生の価値合理性と資本主義の目的合理性の間には、当然相克が発生し続けてきました。かつて経済学、とりわけマルクス主義者の中には、「資本」あるいは「資本主義」という概念を用いれば、近現代の経済だけでなく、



中島隆博

備わっています。「Human Co-becoming」とは、人が絶えず人間的なものへと生成していくようなあり方、そして、他者を通じて、複数性に開かれ、社会的に形成されていくと捉える考え方です。

人間を再定義する際、こうした他者とともに人間的になっていくという、新しい人間観が必要でしょう。資本主義は、まさにそのような新しい人間観を目指してそれを支援すること、また、モノやコトを超えて人を正当に評価し、人間的になりゆくことをサポートすることが求められているのです。そのうえで

政治や社会、文化、ジェンダー間のアンバランスといったあらゆる事象が説明可能であり、現実社会における諸問題は、基本的に全て資本主義の根本矛盾の現れにすぎないという考え方がありました。しかし現実には、体制にかかわらず生じる問題が数多くあります。例えば、社会主義体制であろうが、共産主義体制であろうが、火力発電所がより多くのCO₂を排出する事実が変わりはありません。また、LGBTQを取り巻く問題は、経済体制とは独立して発生しています。かつて期待された「資本」や「資本主義」の過剰な説明力は、割り引いて考える必要があるでしょう。

資本の歴史は、今から5000年程前にまでさかのぼります。人類が初めて都市を構築して国家を作った頃、食料を生産しない商人業者が登場し、貨幣や資本の古い形態が出現しました。それが現在の資本主義に結び付く経済活動のあり方そのものに変化したのは15世紀頃です。すなわち、現在につながる資本主義の歴史は、およそ500〜600年の時間軸の中にあるのです。

現在の資本主義を考える時、「資本だからより高い利潤を求めるのは仕方ない」という、



小野塚知二

今我々に求められていることは、 資本という概念を脱構築すること

ある種の諦めのような議論が潜んでいます。

しかし、よく考えると、それは奇妙なことです。資本は、元をたどれば、単なる貨幣、すなわち記号やモノにすぎません。「自分を増やせ」と貨幣が人間に命令するはずがありません。もし命令するとしたら、それは資本という悪魔が人間に憑依して金もうけを迫っているという、悪魔憑きのような世界です。

人間が貨幣を持つと利潤を求めるようになるのは、人間の側に際限のない欲望があるからです。しかしそのことを、人類はいつから気付いていたのでしょうか。比較神話学や人類

いることは、資本という概念のいわば「悪魔祓い」、すなわち脱構築をすることではないでしょうか。そのことが、マルクスの本来の意図だったのではないのでしょうか。

人間という形で貯金する インフォーマル経済の商人たち

学、考古学の研究成果を紐解くと、5万〜4万年前に際限なき欲望が登場したことが分かっています。貨幣が登場したのは、そこから4万5000年後です。さらにブツダが登場し、際限なき欲望を「煩惱」と言語化し、人間が煩惱から解放されない限り本当の幸福は訪れないと説いたのが、今から約2500年前です。すなわち、際限なき欲望を認知し言語化するまでに4万7500年もかかっています。人間は根源的に、自分が際限のない欲望を持っているということを認めたくない動物なのかもしれません。

マルクスの『資本論』があれほどの影響を持ち得た秘密は、人間に際限のない欲望があるのではなく、「資本は本来的に自己増殖を求めている」と説明することで、自分の欲望に目を向けずに済んだためではないかと、わたしは考えています。いま我々に求められて

久保田 小川先生は、アフリカなどでの文化人類学のフィールドワークを通して「その日暮らし(Living for Today)」という、わたしたちがなじんでいる資本主義や人間観とは異なるコンセプトを提示されています。今の資本主義をどうご覧になっているか、お話を伺えますか。

小川 わたしが研究しているのは、アフリカの路上商人や、アフリカからアジアへ渡り、地下経済やインフォーマルな交易に従事している人たちです。地下経済やインフォーマル

エコノミーというと、小規模な印象を持たれるかと思いますが、地球上の全労働人口の半分の雇用を満たし、経済規模としては米国に次ぐ巨大な経済圏であるとの指摘もあります。

そうした規模や影響力という側面からいえば、インフォーマルエコノミーはある種の主流のエコノミーといえるものの、わたしたちが考えているエコノミーとはかなり異なります。わたしたちは通常、路上商人が露天商に、露天商が小売店に、小売店が商社にステップアップしていく経路を想像しがちです。しかし、彼らはむしろ零細のまま、不安定な環境を生き抜くために分散投資を行うのです。例えば香港とアフリカの間で、携帯電話や医療品の貿易によって1億円もの売り上げを出しているにもかかわらず、銀行預金が全くない人も珍しくありません。露天商として儲かったら全く違うビジネスに着手し、数十もの副業を行うことで、単体での収益の数十倍も稼ぐという形でリスク分散を行っています。

こうしたリスク分散は、彼らにとって利他的な行為とも結び付いています。例えば、生計が多様化したとしても、自分1人で貿易商を行い、同時にタクシー運転手としても働き、

レストランを経営することはほぼ不可能です。そのため、仕事のない若者に商売を任せ、ある程度の利益を上げることができれば、車やレストランといった資本を与えてしまいます。仕事のない人に商売を任せ、自活できるように育てて恩を売ること、貨幣ではなく人間の形で貯金し、自分の分身のような存在を作ることができるとは、500万円の貯金の代わりに、困った時に助けてくれる500人の人間がいた方が安心安全だと思ふ気持ちは理解できるものの、銀行預金とは異なり、いつでも引き出したり自由に使いたりするわけではなく、どういう見返りがあるのかも計算できません。

デヴィッド・グレーバーの『負債論』の中に、「人間経済」という概念が登場します。人間経済とは、人間を作ったり破壊したりすることに主要な関心が置かれた経済のことを意味します。グレーバーは、長い人類史の中で商業経済の歴史は浅く、むしろ人間経済の方が人類社会で普遍的だったのではないかと推論しています。しかし、人間をハブとした経済が商業経済に置き換わると、人間個々の社会的背景は念頭に置かず、あらゆる人間

は形式的に同じだと想定することで経済を動かすようになります。人間は、本来、身体的な特徴や置かれている状況が異なります。だからといって、「あの人は手が小さい」「あの人は笑顔がすてきだ」といったことを全て勘案して給与計算をすることは難しいと。

ところが、タンザニアの人たちは、資本主義経済の中で稼いでいますが、それを人間経済の論理にスライドしているのです。様々な形で投資した人たちの中には、運よく成功する人もいれば、失敗する人もいて、毎日置かれている状況も異なります。そのうち余裕がある人から見返りをもらおうといったことをやりくりしながら、経済を回しており、それは、ある意味で合理的な経済システムとも言えます。

無限の欲望の根底にある、 人間の社会性

久保田 安田先生はゲーム理論などをご専門としつつ、資本主義のあり方を長いスパンで見ると必要性も主張されています。資本主義を巡る議論や現状をどのようにご覧になっていますか。

(注1) Robert Neuwirth 『Stealth of Nations: The Global Rise of the Informal Economy』

不安定な環境を生き抜くための分散投資が 利他的な行為と結び付いている

安田 資本の自己増殖に対する小野塚先生の解釈は、とても興味深い内容だと感じました。人間が抱く無限の欲望の源泉のひとつは、人が社会的な生き物だということでしょう。すなわち、他者と比較して自分の方が優位であるという地位を競う動機があるのです。他者より優位な財やサービスの対象物を、経済学の言葉では「地位財」と呼んでいます。経済学者のソースティン・ヴェブレン氏が提唱した「顕示的消費」（見せびらかしの消費）も、根底にある発想は類似しています。その商品を消費すること自体より、自分がいかに優れているかを周囲にアピールしたいという地位財的欲求は、相手の地位が上がれば自分も上げなければならず、無限の競争構造を生み出します。

例えば、明日食べるものもままならない暮らしだと、まずは目先の数日ないし数週間先

まで衣食住が確保できるかが重要となってきます。欲望は有限の消費財に対して発生するだけで、この時点では無限の欲望は生じません。しかし、食べ物には保存すると腐ってしまう一方、お金は腐りません。貨幣が銀行預金になり、暗号資産といった記号に代わっても同じです。また、貯めれば貯めるほど、お金を使って人を支配できる可能性もあります。所有するお金の量が究極の地位財的な役割を担っているのかもしれない。

現在、世界の億万長者の資産を測ると、上位の人は約10兆円に達し、彼らの金融資産は毎年10%程度で平均的には増加しています。増加分だけでも1年あたり約1兆円で、これだけの額を使う、つまり消費するのは非常に難しいです。国債や株、土地といった高価な買い物は、対象自体が資産なので資産価値は下がりませんし、むしろさらに上がってしま

う場合もあるでしょう。しかし、衣食住を満たすといった物質的な欲求では到底説明できないほどの巨万の富を獲得しても、彼らは富をさらに増やそうとしている。一見すると、尽きることのない欲望があるかのように見えます。その大きな動機のひとつは、上述したように、人間が社会的な生き物だからではないでしょうか。経済誌で紹介される金融資産額やCEO報酬のランキングなど、相対的なポジションに関心や動機がある富裕層が多いのかもしれない。

ちなみに、「資本主義」という言葉は、わ

たし自身が専門とするミクロ経済学の教科書にはほとんど登場しません。いわゆる標準的な経済学では、競争的な市場や、政府の取り組みといった、現実の経済活動の一部だけを切り取って分析します。歯切れ良く分析できない部分は、「市場の失敗」と名前を付けて、分析の外に追いやる傾向があります。しかし、経済学者が見ない外の領域にこそ、我々の暮らしにとって重要なものが潜んでおり、そうした領域への理解なしには他分野の方との対話も成り立ちません。多くの経済学者が対話に加わらない背景には、そもそも学問のフレームワークを対話できない形に閉じてしまっている、という背景がありそうです。

資本主義の これからを考える

今後の資本主義を活かし補完する 「社会的共通資本」

久保田 それでは次に、資本主義のこれからを展望していきたいと思います。先ほど安田先生がおっしゃった、一部の超富裕層だけがますます富んでいく社会というのはサステイ

ナブルなのか、あるいはマーケットメカニズムではカバーできない部分を、宇沢弘文先生の「社会的共通資本」のような別の方法で対応すべきなのか、安田先生に、サステナビリティという観点からご見解をいただけますでしょうか。

安田 ユヴァル・ノア・ハラリ氏は、世界的なベストセラー書の『サピエンス全史』の中で、資本主義とは単なる経済システムを意味する用語ではなく、「資本を生み出すべき」という主義（イズム）が含まれていると述べています。そこで言う資本とは、生産活動の結果から上がってくる利益のうち、さらに生産活動に投資しないし再投資される分を指します。投資されない利益は資本ではなく、死蔵された富にすぎません。ハラリは、個々の企業や社会全体が、実体的な経済活動である生産に利益を回していく社会を念頭に置いて、資本主義のイズムを定義していました。

もし世界の富裕層が蓄積した富から継続的に資本を生み出し、新しい財やサービス、公共的な色彩が強いインフラなどを充実させることで、全体が豊かになるような社会が実現すれば、資本主義の成功と言えるでしょう。

しかし、現実にはそうとばかりは言えません。投資先がなかなか見つからないため、生産活動にお金を回せず内部留保を蓄積したり、自社株を購入して金融的な面で企業価値を高めようとしたりする企業は少なくありません。ハラリの言う資本主義のイズムが発揮できない状況が頻繁に生じていると感じます。

解決のためのアプローチは、ふたつあります。ひとつは、利益を生産活動に回すチャンネルを広げていくことです。もうひとつは、営利企業以外の担い手が生産活動や社会にとって必要な経済を動かしていくことです。宇沢弘文先生の「社会的共通資本」は、後者に該当します。経済活動を担う場や主体は、市場や民間企業だけではなく、地域共同体も存在しますし、国が直接民間に関与する活動も数多くあります。ところが、「市場の失敗」が起こった場合の解決策として、標準的な経済学は、補完的な仕組みを整えたいうえで市場を活用することを主に提案してきました。例えば、「共有地（コモンズ）の悲劇」に対して、土地を細かく分割して私有を認め、市場原理を働かせるようなアプローチです。一方、市場を活用するのではなく、政府が直



小川さやか



安田洋祐

DAOなどの仮想空間上のコモンズは 現代版の社会的共通資本の基盤となり得る

かといって政府に頼るのも難しい、というジレンマを抱えた状況です。そのような中で、半世紀近く前に提唱された第三のアプローチに再び注目が集まっているのでしょうか。

この第三の道を、無理のない形で、現在の市場中心のシステムや行政に補完的に取り込んでいくことが重要な課題です。鍵を握るのは、インターネット上で広がる新たな仕組み、経済圏ではないでしょうか。テクノロジーの進歩によって、ブロックチェーンやNFT(Non-Fungible Token、非代替性トークン)が生まれ、仮想空間上でも様々な情報をモノ化して売買できるようになりました。仮想空間上でも経済活動が担えるようになったことで、DAO(Decentralized Autonomous Organization、自立分散型組織)のような新しい組織の仕組みも発生しています。この延長線上で、仮想空間上にコモンズが次々に誕

生するかもしれません。それは、現代版の社会的共通資本の基盤として、単なる利己的な利潤動機が駆動する市場経済や、一定の資格を持つ公務員が担う国家管理とも異なる、新しい形の協力やコラボレーションをデザインする実験場となるかもしれません。第三の道として、かつて存在感の大きかった地域共同体は、現在あまり活発とは言えませんが、テクノロジーの進歩とも相まって、可能性や選取肢は広がっています。これが、今後の資本主義を活かし、補完していくための明るい材料になるのではないかと考えています。

資本主義の本当の生命力が 試されている

久保田 小野塚先生、今後、資本主義がサステイナブルになるためには何が必要か、ご示唆をいただけますか。

う。すなわち、現在、資本主義と競合し得る経済システムは存在しないのです。先ほど、資本主義が安泰であると言った理由はここにあります。

一方で、気候変動や環境問題を考えると、資本主義はかつてない危機に直面しています。かつてのソ連のような社会主義体制を含め、物質的な代謝システムを考えると、産業革命以降の産業社会は、資本主義であれ社会主義であれ、化石燃料に依存してきました。化石燃料は、採掘費用や輸送費、付加価値を高めるための加工費用などはかかりますが、原料自体は自然界に存在しているので、ゼロ円で済みます。炭素あるいは炭化水素の塊を無尽蔵に近い形で採取できる有利性があるのです。

エネルギーという側面だけでなく、原料面を考えても、例えば東京・大手町界隈の巨大建築物は、主に鉄鋼を構造物材としています。もし全て木材で作ろうとすれば、森林を伐採しなければなりません。18〜19世紀の産業革命によって、石炭から鉄鋼や化学肥料を製造できるようになったことには、機械革命の側面だけでなく、原料革命の側面もあるのです。

面もありました。しかし、再生可能エネルギーで100%代替することが、原理的にも現実的にも可能であることが明らかになったことで、エネルギー革命からはいずれ卒業できる状態になりました。

以前、化石燃料を原料とする化学肥料がない状態で養える人口を計算したところ、およそ20億〜25億人という結果が出ました。しかし、現在の世界人口は80億人で、いずれ100億人に達するだろうと言われています。これらの人口を養うために、現在地球上で人為的に発生している二酸化炭素のうち、4分の1に当たる約2・6ギガトンが、原料革命由来の温室効果ガスだと言われています。すなわち、エネルギー革命から卒業できても、原料革命から卒業できない限り、温室効果ガスは発生し続けてしまうのです。

資本主義以外の経済システムがない以上、資本主義がこれらの問題全てを一手に引き受けて、何らかの方法で解決の糸口を探さなければなりません。そういう意味において、資本主義はかつてない危機に直面しているとも言えるのです。

この先、途上国の人々の栄養状態や教育水

接管理して使用者を限定し、地域や資格を定めただうえで管理するアプローチもあります。これらとは異なる第三の道である社会的共通資本は、必要な自然資本や制度資本の維持や運営を市場に任せるわけでもなく、政府による管理でもなく、適切な人たちが自ら行うというアプローチです。2009年にノーベル経済学賞を受賞したエリノア・オストロム氏も、まさにこの「コモンズの統治」を提唱しています。資本主義のイズムが発揮できなくなりつつある中で、我々の暮らしは、民間駆動型だけでははや豊かになつてはいかず、

小野塚 資本主義は、かつてなく安泰であると同時に、かつてない危機にさらされているとも言えます。19世紀末以降、世界中で社会主義運動が活発化し、現実的な脅威になってきた時代がありました。特に第1次世界大戦後のソビエト社会主義共和国連邦(ソ連)の成立以降、資本主義は常に、社会主義の脅威や競合に対して緊張感を持っていました。例えば、1919年に発足したILO(International Labour Organization、国際労働機関)の第1号条約は、1日の標準労働時間の上限を8時間と決めました。それは、まさに国際社会主義運動が一貫して主張してきたことです。ソ連発足を契機に資本主義の国々が、社会主義の脅威にどう対処するか検討した結果、ILOが発足し、条約や勧告を採択してきました。福祉国家や福祉社会においても、社会主義体制が存在しなかったのならば、国家が国民の福祉に全責任を負うところまで踏み込むのは難しかったでしょう。

しかし、1991年にソ連の社会主義体制は崩壊しました。中国は、共産主義を名乗る中国共産党が統治しているものの、経済システムは資本主義と言って差し支えないでしょ

準、生活水準などが上がれば、世界人口が1

00億人に達したとしても、いずれ人口増加率は鈍化し、減少局面に入るでしょう。実際、世界の人口増加率は21世紀に入って低減しています。今後数百年の間に人口減少は本格的に進むでしょう。1人当たりGDPが同一だと仮定すれば、当然GDPもマイナス成長になるのは明らかです。従来の資本主義は、人口増加と1人当たりGDPの成長との両方に支えられて順風満帆に発展し、社会主義との競争にも勝ち残ってきました。しかし今後、人口減少とマイナス成長の世界で資本主義を成り立たせられるかが課題となっています。まるで、退場できない役者のようです。

このように資本主義を巡って、現在様々な問題が表出しています。原料革命もたらす環境問題や、人口減少とマイナス成長に耐えて生き残らなければならないという、極めて危機的な状況にあります。今まさに資本主義の本当の生命力が試されているのです。

「人間」の生に向き合う倫理的経済を

久保田 資本主義は、どうすればさらに発展し、問題を解決できるのか、中島先生のご見

解を伺えますか。

中島 資本主義に代わる経済システムがない以上、資本主義にはもうひと舞いしてもらわなければなりません。しかし、現在のままのあり方では立ち行かなくなることを、経済活動の現場にいる方々は、より痛切に感じているらっしゃることでしょう。資本主義に頑張ってもらうための手がかりを考えるうえで、「人間」はその鍵となる要素です。

安田先生からご指摘があったとおり、実際のない欲望は比較することから発生しますが、人間が社会的な存在である以上、比較する人間の特性はなかなか変えることができません。ところが、歴史的に見ますと、ある限界点に達すると、欲望は止められていました。わたしが専門とする中国哲学では、ある時点で欲望を止めることが善であるとして、無

際限の欲望を厳しく戒めています。無際限な欲望に人間を駆り立てた原動力として、近代的な「神」の問題は非常に大きいと考えています。近代の特徴は、人間が教会のような媒介なしに聖書などを通して、神と直接向き合う点です。神という無限の存在に、有限の人間が向かい合うという、考えてみれば恐ろしい

考えており、わたしもこれに賛同しています。無際限の欲望をただ拡大させていくためだけの経済活動は、様々な矛盾に突き当たり、企業の持続性につながらないでしょう。資本主義を飼いながら使っていくためには、倫理的経済に方向転換することが必要です。

人間の代え難さが組み込まれた経済の必要性

久保田 現在の資本主義への教訓として、インフォーマル経済の観点から小川先生にご示唆をいただけますか。

小川 資本主義経済のサステナビリティを考えると、際限のない欲望の競争は持続性がありません。今まで維持できたのは、インフォーマル経済に従事する人たちのように、そこからこぼれ落ちた人たちが、戦争や暴動を起こすわけでもなく、自力で生きてきたおかげです。しかし現在は、先進国の中でも労働市場の不安定化や流動化によって、苦境にあえぐ人たちが数多く存在します。

人間にとっての承認欲求は、必ずしもモノの所有や貨幣の量だけで満たされるものではありません。資本主義経済をサステイナブル

にするには、もっとグレーで不完全かつインフォーマルな領域をいかにうまく盛り込めるかが重要だと考えています。例えば、安全性が損なわれない限り、フリーライダーのような存在をある程度受け入れるインフォーマルでグレーな領域は、セーフティーネットにもなるでしょう。

タンザニアの商人たちは、成功したい、豊かになりたいと言いつつ、時折自分の財を手放すことがあります。彼らにとって、財を手放すとは、手っ取り早く承認を得る手段だからです。例えば、露天商が顧客に割安な価格で販売したり、バスの運転手が無賃乗車を黙認したりします。そうすると、その恩恵を受けた人にとって、その露天商や運転手は、他の人には代え難い存在になります。資本主義経済の中で他者と競争することは変わらないものの、万が一そこで失敗した時に、以前財を手放した相手から助けてもらえる可能性が生まれます。そのような存在は、他者との競争を生き抜くうえで、心のセーフティーネットにもなるのでしょう。

自分の生きた痕跡や系譜を残したいというのも、人間の根源的な欲望のひとつです。そ

いことが生じたのです。マックス・ヴェーバーは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の中で、神と人間が直接向き合うことで無際限に開かれてしまった欲望の問題を、別の角度から考えていたと言えるでしょう。

神とは違い、人間は不完全で弱く社会的な存在です。資本主義は、欲望を無際限に高める方向ではなく、人間の生のあり方にきちんとかき合い、それを豊かにする方向に舵を切ることが重要ではないかと、マルクス・ガブリエル氏と議論を重ねています。ここでは、近代的な道徳律とは異なる倫理的経済についても考え直さなければなりません。それは、他者と共にある人間のあり方を豊かにするものだ、とわたしは考えています。徳倫理学では「Flourishing」と「Flowering」という言葉がよく使われます。不完全な人間の望みが花開くようなあり方をサポートしていくことこそ、倫理的なのではないでしょうか。能力の延長ではなく、違うあり方に変容していく倫理を後押しすることが必要なのです。

ガブリエル氏は、これからの企業は倫理的な経済活動を主流にしないと生き残れないと



撮影：遠藤 宏

「社会性の視座 (From the social point of view)」に立脚した 企業行動を実践していく

の際に、どのような人が自分の生きた痕跡になるかという点、競争で蹴落とされた人ではなく、自分が育てたり支援したりした人です。人間の欲望の根底にはそういう点、子どもや弟子、フォロワーのような存在を作っていくことがあります。タンザニアの商人たちは、資本主義経済と贈与経済をミックスさせて、他者との比較の欲望と、自分自身の個人的な欲望との帳尻を合わせているのだと考えられます。

わたし自身は、テクノロジーや技術が全ての課題を解決できるという解決主義に疑問を持っていきます。欲しい時に欲しいものが手に入ることも、大したものでもなく、好きな人からももらえる方がうれしいと思う人は少なくないのではないのでしょうか。サーキュラー・エコノミーやシェアリング・エコノミーを考えるうえでも、人間らしさが組み込ま

れたテクノロジーが生まれたらよいなと思います。また、先生方のご示唆をいただけますか。

これからの資本主義経済における 企業行動とは

久保田 最後に、これからの未来社会を望みたいものとするために、経済界に期待する役割について、先生方のご示唆をいただけますか。

新たな企業が生まれる 健全な環境作りを

小野塚 経団連の政策提言や文書には注意深く目を通してきました。どれも経済団体として健全な見識、正当な主張であると思います。あえて申し上げますと、まず、人口減少とマイナス成長の社会で資本主義的な企業がいかんとして生き残っていくのかについて、前向き

きな人々を支援したりするなど、企業だからこそできる仕掛けはたくさんあります。目を転じれば、従来とは異なる形で資本主義を活用できるのではないのでしょうか。

2点目は、人間型の資本主義です。わたしは、ゲーム理論の中でマッチング問題の分析を専門としています。貨幣が登場して経済が成長し、資本主義が発達するという資本主義の歴史は、匿名化の歴史でもあります。千円札に千円の価値があるからこそ、宗教や言葉が異なり、互恵性や利他性が働かない人たちの間でも、お金のやりとりを通じて幅広い経済活動が可能となり、世界経済は発展してきました。半面、人間が元々持っている社会性や、つながりから得られる承認欲求や安心感がどんどん欠落してしまいました。しかしそれを、次の資本主義のステージでは取り戻せるかもしれません。例えば、千円札を眺めていてもこれまでもどういった経済活動を経てきたお札なのかは分かりませんが、ブロックチェーンには今までの取引が全て記録されます。その人がどれだけ粋な NFT を購入してきたか、どのような事業に寄付してきたか、といった情報が刻まれていけば、承認欲求が満た

されたり、将来のセーフティネットになったりするかもしれません。こうした取り組みを行う企業が増えて、日本の資本主義が新しい形で発展する未来を、ぜひ期待しています。

異なる社会のロジックから 「当たり前」を問い直す

小川 わたしが専門とする文化人類学は、異なる社会のロジックから、わたしたちが当たり前だと思っていることを問い直す効果があります。タンザニアの商人たちは、結果として分配や贈与が起こっていたとしても、彼ら自身は利他精神に基づいた「人格者」というわけでも、環境倫理を順守しているわけでもありません。どちらかというと、とてもしたたかな人たちなのです。

現在、個人の消費においても企業活動においても、エシカルであることが求められています。そうした面のみで一直線に進んでしまつと、疲弊してしまうのではないのでしょうか。どのような面白さがあるのか、というのは重要な要素だと思っております。

例えば、わたしは最近、シリアスゲームを用いて、アフリカの民族誌のゲーム化に取り

な金融商品を作ったり、個人ではサポートで

り得るでしょう。旧来型の利潤動機での投資とは違う方法でお金を動かすために、魅力的な金融商品を作ったり、個人ではサポートで

(注2) 1993年9月2日公表。経団連ウェブサイト参照。
http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2003/122/kangaekata.html



(司会) 久保田政一

組んでいます。このゲームを実際に体験してみると、例えば彼らがダイバーシティを重視するのは、生き抜く確率が上がるから、といったロジックが見えてきます。無理にダイバーシティやマイノリティー対策を講じるのではなく、結果的にマイノリティーに配慮できる世界を考えられたらよいなど考えています。

また、安田先生がお話になったブロックチェーンにも関心を持っています。例えば、ブロックチェーンの構造は、ヤップ島の石貨に例えられることがあります。ただ、一般的に人類学の知見が比喩的に用いられることで解釈の重心が異なるかたちで伝わる場合があります。石貨に記録されているのは、和解や贈与といった過去のイベントの記憶です。あの時に何をしたという過去の記憶が、次にそのお金を受け取るか否かの判断に関わってくるということが重要です。人類学の視点を参考に、ブロックチェーンのシステム構築にも取り組んでいけたらと思っています。

不完全で弱い人間を主体とした 資本主義のあり方

中島 資本主義のあり方を検討することで、

わたしたちが考えるのは、来るべき未来の社会のありようです。未来とは厄介なもので、現在の可能性の延長線上に姿を現すものではありません。わたしたちは複雑系の中に生きています。例えば、株式市場では、株式予想自体が相場形成に織り込まれるように、未来について想像したこと自体が未来を作る側面があります。ですから、「できる」という可能性の延長線上ではなく、「何を望むか」という希望の次元で未来社会を育てていくことが極めて重要だと考えます。

資本主義とは、貨幣が資本として運動するだけでなく、我々のイマジネーションを引きずりながら動いている複雑なシステムです。わたしたちの想像力を解放し直し、近代的で倫理化された個人像だけではなく、不完全で弱い人間が何とか社会を共に構築していくといったモデルを模索し、かつ、そこに楽しみが生まれるような社会のあり方を構想することが重要です。さらに、企業活動の中にも、そういった想像力の次元が刻み込まれなければならないと強く感じています。

スコアリング(数値化)に陥ることなく、顔が見える関係に基づいた経済を考える方法も

あるでしょう。スコアリングが前提にする計算可能性とは違う方法で、人と人が付き合うことは、哲学の課題でもあります。哲学は抽象的な問題を解くのではなく、アクチュアルな問題に真に迫るための概念や言葉を磨く学問です。今後、他の諸学問と共に、今、我々が直面している問題に切り込んでいきたいと思っています。それには経済界の方々との協力が必要だと考えますので、今後ともぜひお力添えいただければ幸いです。

久保田 今回の対話では、「社会性の視座(From the social point of view)」に立脚した企業行動の実践に向けて、様々な視点の提供や課題提起をいただきました。21世紀政策研究所では、今後もマルクス・ガブリエル教授との共同研究などを通じて、資本主義のあり方について、引き続き検討を進めてまいります。本日は、ありがとうございました。

(2023年2月9日 経団連会館にて)